



## 「日常の気象事典」

平塚和夫 編

東京堂出版、2000年、474頁、  
3,200円（本体価格）

これは気象についてのユニークなたいへん面白い「読む事典」である。はじめに著者（書名では編者となっているが、内容的には著者の方が適切である）の平塚和夫さんの経歴を紹介しておく。こういう経歴の人でないと、このような著者はなかなか書けないと思うからである。著者は1928（昭和3）年生まれ、1947（昭和22）年中央気象台付属気象技術官養成所本科卒業、中央気象台統計課、鳥島測候所、天気相談所、新東京航空地方気象台などを経て、気象庁初代広報室長、釧路地方気象台長、気象庁予報部通報課長。1988（昭和63）年気象庁を定年退職。その後日本気象協会解説予報部、千葉大学非常勤講師などを経て、現在、気象春秋会機関紙編集委員を務めている。このような著者の様々な仕事上の経験、事物に対する並々ならぬ知的好奇心、それに基づく博覧強記が、項目の選び方や説明の仕方、問題の切り口などにうかがえる。

本書は1年を二十四節気に分け、各節気の気象の話題が解説されている。二十四節気は小寒から始まり大寒、立春……と続いている。小寒・大寒が初めにくるのは、それがだいたい太陽暦の1月に対応するからであろう。小寒の部の話題をあげると、小寒の気候表、沖縄の桜、1月の日照時間・紅線日を量る、海溝型の地震、春はあけぼの、冬はつとめて、天気・天候・気候、平年値、小寒の氷が大寒に融ける、低気圧の成人、『冬の旅』、寒波のかたより、発車のベル、季節・旧暦は太陰暦でなく太陰太陽暦、年賀状の“春”、初の子・御降・百人一首である。これらの話題の導入・展開の仕方も変わっている。たとえば1月7日の「七草がゆ」から「七種爪（ななくさづめ）」の風習に話が進み、人間は爪を切らないでくと1年間で約5cmになるという。そして、この速度が海底の動く速度とほぼ同じことから、海洋底拡大説、海嶺、海溝、プレートテクトニクスなどの説明が行われている。プレートテクトニクスのテクトンはギリシャ神話にでてくる大工の名前でテクトニクスは建設、構築を意味する言葉だということにまで及ぶ。さらに話が進んで海洋底拡大の

発見に軍事技術が大きい役割を果たしたことから、天気図と電信とクリミア戦争の話に転じ、日本の天気図の作り始めなどの最初の日付が日記される。また「成人の日」から低気圧の一生の話題に転じ、冬季日本の東の海上で発達する低気圧による寒土用波の話があり、明治時代の文献には低気圧の言葉はなく「気圧の低度の部位」などと書いてあるという。そして、低気圧という翻訳語を考案したのは、馬場信倫であること、彼は1858（安政5）年生まれ、日本の気象事業の創業期の功労者の一人であり、後に商船学校で気象学を講じ、1940（昭和15）年に没したと、その略歴が述べられている。「発車のベル」は都はるみの唄う『さよなら列車』の歌詞の一部で始まり、電気仕掛けの発車ベルが初めて登場したのは何年の何駅と話を進めて、音波の伝わり方と気温分布の関係を述べ、富士山測候所ではダイヤモンドダストのきらめく朝に、ふもとのニワトリの鳴き声を聞くことがあると記す。

立春の章では気温の最低記録の出た時期、道真の梅が東風で咲く理由、陰陽五行説と季節・方角の色、皇太子を東宮と呼ぶ由来などが述べられ、「積雪とクレヨン」では雪の表面にクレヨンを置いた実験で、2時間に白が7cm沈んだのに対し、黒色は40cmも沈んだという実験例が紹介され、雪国の畑の春の消雪作業の話が出てくる。「春一番」では、火の粉の飛ぶ距離と風速の関係にも触れられており、また北海道での「雨一番」の平均日の統計が載っている。「雨一番」は、立春の後、はじめて雪をまじえずに雨だけが降る日をいい、著者の造語だという。

と、まあ、例をあげていくときりがないが、この本では、民俗的・歴史的エピソードや古典の詩歌、現代の演歌、文芸作品、事物起源物語などをちりばめながら、各季節の気象の話題が工夫された気候表とともに興味深く記されていて、読み始めるとなかなか止められない。著者の経歴上、北海道の風土もよく話題になっているが、同じ経験を持つ評者には同感するところが多かった。が、流水の海に津波がきたらどうなるかの例は私にとって新知識だった。また日本の領土だったころの南樺太の大泊測候所の気候資料や花の開花平均日のデータも珍しかった。

気象業務の一人のヴェテラン（古つわ者）の個性的で珍しい「覚え書き」や楽しい「語り」に触れてみたい人にぜひ勧めたい本である。

（元鹿児島気象台長 倉嶋 厚）